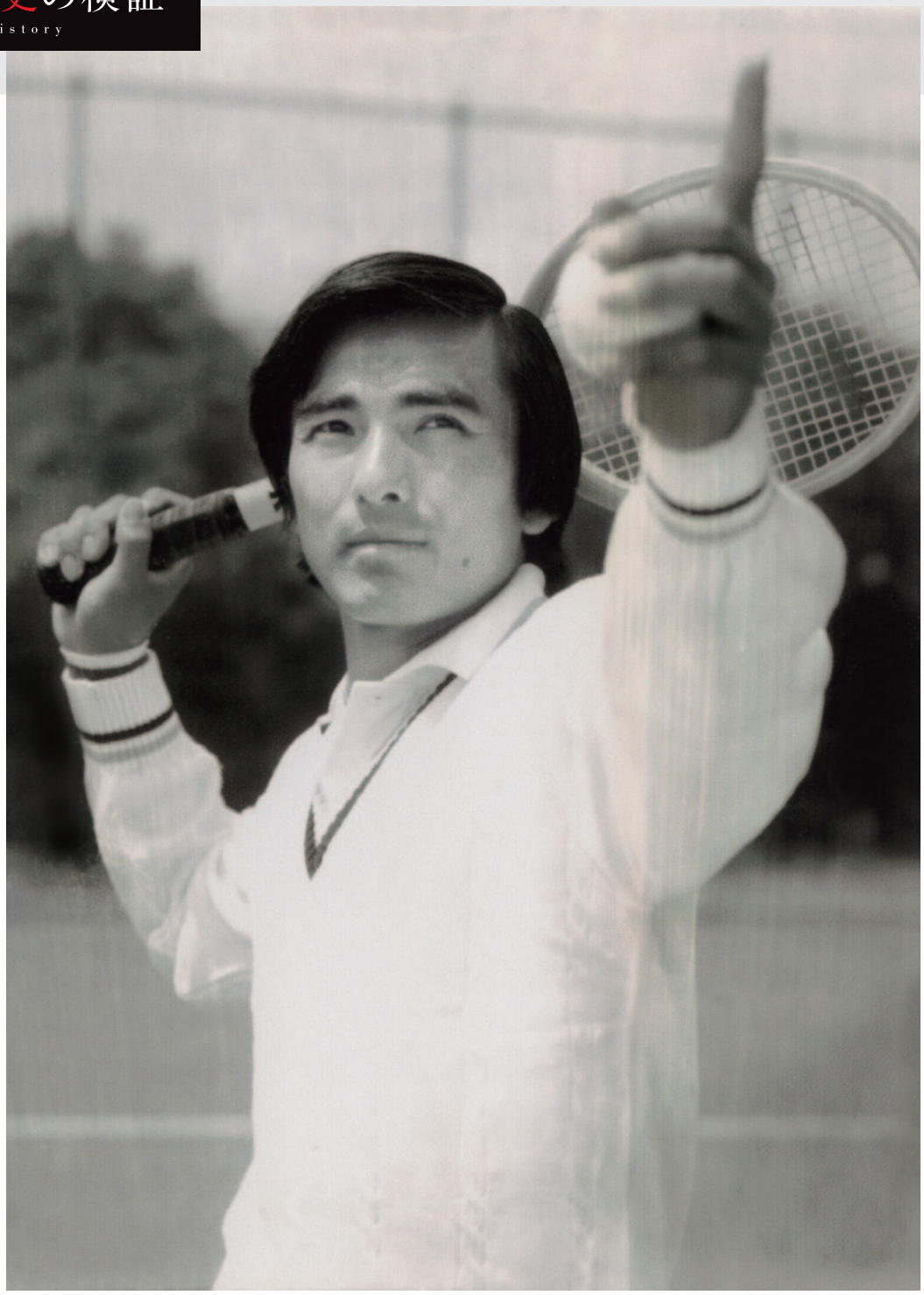


第27回

日本プロテニス界のパイオニア
神和住純

kamiwazumi jun

日本プロテニス界のパイオニア

神和住純

2014年9月、日本テニス界の歴史を塗り替える素晴らしい“事件”が起こった。起こした当事者は錦織圭選手。テニスの四大大会の一つである全米オープンテニスで、日本人、いやアジア人として初めて決勝に進出し、準優勝に輝くという快挙を果たしたのだ。
2008年の同大会で錦織選手がベスト16に入るまで、全米オープンで3回戦への進出経験があった唯一の日本人選手が、今回のゲストである神和住純さんだ。
神和住さんは、テニスの海外トーナメントへ挑戦した日本で初めてのツアープロでもある。
そんな神和住さんに、当時の日本のテニス事情、プロ転向の経緯、トーナメントプロとしての生活、指導者としての視点、今後のテニス界への期待などについてお話を伺った。

聞き手／山本浩　文／山本尚子　構成・写真／フォート・キシモト

世界で唯一の「神和住」姓

―― 実は我々、法政大学健康学部の教授という肩書きを持つ同僚でありまして、いつものように「神和住先生」とお呼びしてしまうかもしれませんが、ご容赦ください。
いえいえ、私も「寅（トラ）さん」と呼ばないように気をつけます。

―― 神和住さんのご出身は石川県とか。
そうです。僕の「神和住」という姓は、世界中で僕だけなんです。石川県の能登半島の能登町というところに神和住という地名があるんですよ。僕の5代前くらいの先祖・神和住茂助という人が地名を名字にしたと言われていて、それが親父まで伝わり、繁殖能力が低かったのか、いま男は僕しかいない状況です。

生後まもなく両親と
（全日本ソフトテニス選手権の会場にて）

両親、知人家族と

2歳のとき、ラケットを持って

両親は軟式テニスの全日本チャンピオン

―― その神和住さんがテニスを始めたきっかけを教えてください。
僕の父が育った石川県宇出津（うしつ=現・能登町）というところは、小学校の先生が授業に軟式テニスを取り入れていて、少年テニスが盛んだったんです。僕は「能登町ふるさと大使」として、いつも「世界一の縄文土器とテニスの町」とPRしています。両親は軟式テニスが縁で知り合い、僕が生まれました。

―― ご両親とも名選手だったそうですね。
二人とも軟式テニスの全日本チャンピオンになっていますが、母のほうが成績は上だったと聞いています。僕がお腹にいたときも、まだ国体に出場していたそうですよ。

―― ははあ、神和住さんは生まれる前からテニスをしていらしたんですね。実際に始められたのは中学生のころですか?

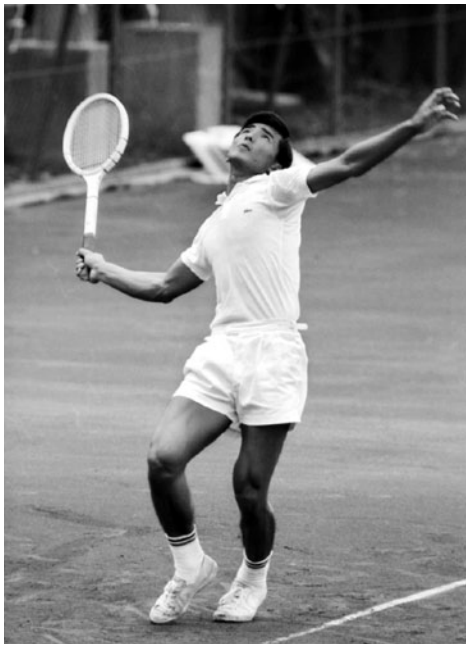
小さいときに石川県から東京に越しているのですが、子どものころにラケットを握っている写真はたくさんあります。でもよく覚えていないので、遊んでいただけでしょうね。中学生になってから軟式テニス部に入りましたが、これも自ら望んだのか強制的なのかどっちだったかなあ。

中学時代、パートナーの竹下君(右)と

硬式へ転向、バックハンドを猛特訓

―― 硬式テニスは高校に入ってからでしょうか?

法政二高に入ってからです。15歳ですから遅いスタートですよね。「軟式をやっているおまえの息子を硬式に転向させたらどうだ」と父に勧めてくださったのが、松本武雄さんという方でした。法政大学の体育講師兼監督で、付属高校の練習も見てくださっていた松本さんは、現役時代、親父と1歳違いでライバル関係にあったそうです。



華麗なサーブフォーム

―― 不思議なご縁でしたね。軟式から硬式への転向はどうでしたか?

僕にとっては大きな転機となりました。まずバックハンドの打ち方が違う。軟式はフォアハンドもバックハンドもラケットの同じ面で打ちますが、硬式ではバックは反対の面で打ちます。最初はホームランばかりですよ。松本先生と毎日、朝練をしました。それからグリップ。軟式はいわゆるウエスタングリップですが、イースタンに変えたので、僕のテニスには軟式の名残がありません。硬式のグリップで来る日も来る日もバックハンドの練習。お陰で、フォアハンドよりバックのほうが得意になりました。

テニスノートに夢を書きこんでは実現させていった

―― 1965年、高校3年のとき、その後、神和住さんと終生のライバルとなる成城高校の坂井利郎さんを破ってインターハイでタイトルをお取りになった。

硬式テニスを始めてたった2年半でインターハイを取っちゃいました。

僕は「テニスノート」をつけていたんです。松本先生がノートをくれてね、「毎日、何でもいいからとにかくテニスのことを書け」と。「きょうは6−0、6−1で先輩に負けた」「ダブルフォールトを〇回やってしまった」「先生にグリップをこう握れと言われた」。練習でのことも試合での反省もいろいろ書きました。プロになってからも書き続けました。

―― 意外と几帳面なのですね。

そして先生は、「自分の夢を書いておけ」とも言いました。

高校1年のときの夢は「インターハイで優勝して、マイアミのオレンジボウル選手権(ジュニアの国際大会)に行くぞ」。そう書いたら、全部、実現しちゃいました。

でもオレンジボウルに行ったら、強い選手がたくさんいて、3回戦ぐらいで負けたんです。世界のレベルの高さを知って新たな目標ができました。

―― 具体的には、どんな目標を持ちましたか?

強くなったら海外に行けるんだということが1つ。

日本プロテニス界のパイオニア

神和住純

海外に行けば強い選手と対戦できます。だから国内では負けていられないので、大学生になったらインカレで優勝して、国を代表するデビスカップの選手にもなりたい。プロはまだありませんでしたから、アマチュアとして頑張っていい会社に入ろうと決めました。

7年間にわたるハードなトレーニングで基礎づくり

―― 法政二高から法政大学へ進まれました。

僕がラッキーだったのは、法政二高は全国制覇をしていたレベルの高い学校だったことです。コートは武蔵小杉にあって、大学生も一緒のコートで練習していましてね。練習量がハンパじゃなかった。高校から大学生までの7年間、あの猛烈な練習量が僕を育ててくれた修業時代となりました。

―― トレーニングメニューはどのようなものでしたか?

朝から晩まで球を打ち合って、それが終わったら陸上競技場へ移動して、400mトラックを10周。コートに戻って、腕立て伏せ200回、腹筋200回、体操などをして、読売ジャイアンツの多摩川グラウンドまでランニングといった流れでした。

―― キツそうですね。

腕立て伏せ200回といっても最初からはできません。150回が限界なら、最初はそこまでじゃないですか。それで少しずつ回数を増やしていくという、自然の流れに沿って強化するトレーニングです。そのせいか、僕は38歳まで現役でしたけど、ケガのない選手だった。トレーナーからは「柔らかくてぷよぷよと弾力があって、こんなカモシカのような筋肉は見たことがない」と評されるほどでした。

―― 生まれつきもあったかもしれませんが、18～19歳の時期にしっかり鍛えたのがよかったのですね。そのころ、法政といえば野球部が強かったでしょう。

小さな大投手といわれた山中正竹が同期にいて、エモやん（江本孟紀）がいて、1年先輩には田淵幸一さんや山本浩二さんがいました。野球部の合宿所が隣にあって、みんなテニスコートの横を通ってグラウンドに行っていましたね。

1970年　ユニバーシアードトリノ大会ダブルスで優勝
右は坂井利郎

海外の武者修行で刺激を受ける

―― インカレで3連勝されたあと、オーストラリアに行かれましたね。

日本テニス協会から、僕と坂井とあと2人が派遣されました。当時、全豪オープンテニスの会場だったクーヨン・テニスクラブというところです。オーストラリアの代表監督を長く務めたハリー・ホップマンという名コーチたちに、1カ月みっちりと指導を受けました。それまでテニスは先輩や先生が教えてくれるものでしたから、1時間いくらでお金を払って教えてもらうという体験は新鮮でした。

―― ああ、そうですか。

大切な目的の1つが「芝生のテニスを学ぶ」ということでした。当時、日本には芝生のテニスコートがありませんでしたからね。そのころ、グランドスラム（全豪、全仏、ウィンブルドン、全米）のうち、全仏以外は全部芝生でした。今はクレーやハードコートに変わっていますけど。

初の海外遠征へ出発
（左は1年先輩の浅田さん）

バックハンド（ウィンブルドン）

―― そのころ先端を行く芝生のコートで練習してこいということですね。
当時、プロかアマかという感覚はありましたか?
最初は全員アマチュアでした。国際的には1968年にオープン化されて、まだ組織的には未整備でしたが、ロッド・レーバーやケン・ローズウォール（ともにオーストラリア）といった選手がプロとして活躍し始めて、羨ましく思っていました。

住友軽金属の社員として アマチュア生活を3年半

―― 大学卒業後、住友軽金属工業に入社されました。
大学2年でインカレ優勝したころに、声がかかりましてね。だから僕は就活は一切していないんです。

―― あのころの住友軽金属というと、渡邊康二さんなどがいらっしゃいましたね。
渡辺功、坂井利郎、西尾茂之、平井健一もいましたね。軽金属の田中季雄社長はテニスがお好きで、日本テニス協会の会長をなさっていて、協会に貢献するために毎年2選手ずつぐらい採用して、どんどん海外に行かせようという発想を持っていた方でした。全部で10人くらい採ったのかな。

―― 当時のステータスはまだアマチュアでしょう。神和住さんも仕事はされていた?
していました。総務部総務課所属でした。午前中、仕事をして、午後から吉祥寺のコートに練習に行くという感じで。普通に入社している人たちはみんな優秀ですから、スポーツで入れてもらった僕たちはスポーツで頑張るしかないという気概を持っていました。
とにかく待遇はよかったですよ。これだけ予算があるから、海外遠征してこいということで、全仏とウィンブルドンの季節になると2～3カ月遠征して試合に出場するという生活を3年半ほどしていました。

―― 給料は?
3万2000円ぐらいですから、当時の相場ぐらいだったかと。あとで聞いたのですが、海外遠征については会社が遠征費としてまず協会に寄付をして、協会からの派遣という形でやっていたようですね。

25歳でWCTとプロ契約

―― プロ契約したのはおいくつのときですか?
1973年、25歳のときです。僕は全日本で3連覇していました。ウィンブルドン遠征の2年目のときか、WCT（ワールドチャンピオンシップテニスという独立興行団体）に「キミは日本のナンバーワンだから契約しないか」と坂井と一緒に誘われたんです。

―― 契約内容について教えていただけますか?
2月からグランドスラムが始まる4月か5月くらいまで、WCTは10個ほどのトーナメントを各週開催していました。各国の選手が70～80名ほど所属していたでしょうか。条件は、1回戦で負けると、つまりミニマム・ギャランティーが500ドル。当時のレートだと1ドル300円で15万円ですね。1回勝てば1000ドルで30万円になるわけです。倍々ゲームですよ。会社の給料が3万円の時代ですから、すごいなと。

初の全日本チャンピオンに輝く（24歳）

ウィンブルドンでアン清村と混合ダブルスを組む

—— ダブルスはどうだったのですか?

ダブルスだとミニマムが200ドルで、2人で割るから1人100ドル。つまりシングルスとダブルスに出場するだけで最低でも600ドル、勝てばもっと増える。それが10試合あるよという話で魅力的だと思ってサインしちゃいました。渡邊さんには、会社員の身分でまずいぞと怒られましたけど、もう辞める覚悟をしていましたから。正式に契約したのは、その年の12月で、そこがまた僕の大きな転機でしたね。

それと、ラケットのカワサキと契約できたことも大きかったんです。今のプロなら当たり前の契約ですが、長期契約を結んだことで、契約金で家を買うことができました。僕は結婚が早かったんですけれども、あとは飯を食えるだけの賞金を稼げればいいと。

予選敗退と本戦入りの格差を、嫌というほど感じる

—— ウィンブルドンなどのグランドスラムは、最初は予選ラウンドからの出場でしょう。

予選も本選からも両方経験しましたよ。当初は今のようなATP(男子プロテニス協会)ランキングがなくて、各国にナショナル枠があり、日本のチャンピオンは自動的に出場できたんです。

1972年にATPが創設されてからはそうはいかなくなりました。予選を3回戦ってようやく本戦入りできるのですが、勝ち上がるのは本当に大変です。昔はタイブレークがありませんし。予選会場はウィンブルドンではなくてバンク・オブ・イングランド・スポーツクラブという辺鄙(へんぴ)なところなので、電車やバスを乗り継いで行くんです。

—— 本戦からの選手とずいぶん格差があるわけですね。

本戦に入れれば、オフィシャルカーで迎えに来てくれる。飯は食えるし、タオルも貸してくれるし、ロッカーもある。待遇が全然違うんですよ。だからダブルスでもミックスでも、とにかく本戦に入って“プレーヤー”としてレジスターしたいという気持ちがありました。

当時は予選落ちは一切賞金がなかったですしね。線引きがはっきりとあって、ロッカールームもシード選手はセンターコートの下のいい個室があてがわれる。クルム伊達(公子)に聞いたんだけど、今は上位のシード選手には、メイド付きのリビングルームがあるそうですよ。

伊達公子(右)と

—— へええ。

本戦へ入っても、僕らのロッカーは2番コートの下のタオルが敷き詰められただけの、ダーっと長い学校の体育会の部室みたいなところなんです。だからみんな、そこから這い上がっていこうとするわけですよ。「強くならないとダメなんだ」ということを、ウィンブルドンで嫌というほど味わいました。大変だけど、好きな道へ入ったのだからやるしかないという感じでした。

プロは「勝つしかない」というテニス観

—— 世界ランキングでいうと、神和住さんはどのあたりでしたか?

最終的には100位の少し手前くらいをうろうろしていて、最高位は78位でした。グランドスラムの場合は、128人が本戦入りですから、100位あたりにいれば予選を戦わずにすむんです。

僕は週末まで勝ち残れる選手ではなかったので、そういう大変さもありました。

—— どういうことですか?

月・火・水の1～2回戦で、たいてい終わっちゃう。木・金はベスト8の試合で、週末は準決勝、ファイナルでしょう。負ければ終わりで移動しなければならない。何泊するのか自分でもわからないから、宿の手配が大変でした。ATP(男子プロテニス協会)ができてからは、オフィシャルホテルが手配できるようになったのでやりやすくなりましたけどね。

—— 当時の神和住さんのテニス観というのはどんなものでしたか?

プロはケガをして出られなくなるとポイントが下がってしまう。アマチュアなら接戦で敗れたとしても、「惜しかったね、キミは将来性があるからがんばりなさい」と称えられたりするじゃないですか。でもプロの世界は、ファイナルセットのタイブレークまで

フォアストローク(ジャパンオープン)

1974年
ジャパンオープンで優勝

持ち込んでも、負けは負け。とにかく図式がはっきりしていて、「勝ち」か「負け」のどちらかしかない。だから最終的に勝利をおさめなければいけないと、勝負に対する執念が刻み込まれましたね。

弱きを助けて強きを挫く?

―― そんな世界で、神和住さんは「ジャイアント・キラー」の異名をとったんですよね。

1974年に、当時、世界ランク6位か7位だったかと思うけど、全米とウィンブルドンの優勝経験を持つスタン・スミス(米国)という選手に勝ちました。一度目は全仏オープン、同じ年に全米プロテニス選手権で当たってそこでも勝ちました。面白かったのは、スタン・スミスとダブルスのペアを組んでいたボブ・ラッツという男が僕のところにやって来て、「僕はスタンに一度も勝ったことがないのに、なぜおまえは勝てるんだ?」と聞いてきたんですよ。「彼は僕のカモなんだ」と言ってやりました。

―― あはは。

僕のテニスは、弱い選手に負けて強い選手に勝つことが多かったんです。僕としては相手に合わせて戦術を繰り出していたのですが、監督にはよく怒られていました。

―― 相手にしてみれば何をしてくるかわからない嫌な選手ですよね。テニス界の舞の海みたいな。

オープン化が遅れた日本テニス界

―― 日本のテニス界は、プロアマのオープン化が遅れていたんでしょう。

はい、僕は25歳でプロになってから30歳くらいまでの、選手として一番パフォーマンスがよい時期に日本の試合には全く出場できなかったんです。日本プロテニス協会は1973年に立ち上がっていたのですが、日本テニス協会と日本体育協会の間での調整がうまくいっていませんでした。外国の選手たちはプロでもデビスカップに出場できているのに、なぜ僕らは出られないのかと。

それでも僕らの後輩がどんどんプロになり、国内でプロの大会が開催されるようになって、プロアマのオープン化がやっと実現したのが、1978年3月ごろ。僕は30歳を過ぎていましたが、ようやくデビスカップにも出場できるようになりました。

―― 日本テニス界のまさに過渡期にあたっていたんですね。

ライバル坂井利郎氏との生涯対戦成績はイーブン

1972年　ウィンブルドンに坂井利郎と
ダブルスを組み出場

―― 神和住さんが引退されたのは……。

1986年で、38歳までやりました。オープン化されて以降、若い選手が出てきましたけれども、僕はまだまだ勝てました。36歳か37歳のときに年間7勝ぐらいしていて、それは自慢できることですね。

―― 最後の大会は、坂井さんと14年ぶりにダブルスを組んで出場した全日本選手権でした。

ああ、そうでしたっけ。

―― 坂井さんはプロにはならずアマチュアで通されたんですね。

彼は僕と一緒にWCTに誘われたんですけど、ヘルニア持ちだったので「ツアーで回るのは厳しいから住友に残るよ」ということでした。遠征のとき、安ホテルのベッドは柔らかいから、シーツの下にラケットを入れて寝ていましたね。

資料を調べていてわかったんですが、ライバル坂井との生涯対戦成績は22勝22敗でした。全くのイーブン。

―― それはすごいな。
珍しいでしょう。それでもインターハイ、インカレ、全日本、何かの大会の決勝など大きな試合ではほとんど僕が勝っているんですよ。
どんなスポーツでも「好敵手」の存在は大きいです。僕には坂井がいましたが、松岡修造がかわいそうだったのは同時代にライバルがいなかったことですね。

引退後、TVキャスターを経て大学教授の道へ

―― お辞めになったあと、TVキャスターなどをなさいました。
NHK教育テレビで「ベストテニス」の講師を5年間。スポーツ番組のリポーターを少しやったあと、日本テレビの「独占!!スポーツ情報」でキャスターを4年間やりました。いい経験をさせてもらいました。

―― 元祖アイドル・スポーツアスリートキャスターですね。それから今度は教壇に立たれます。鹿屋体育大学の教授になられたのが1995年。
これは僕の3つ目の転機でしたね。1つ目が硬式テニスへの転向。2つ目はプロへの転向。そしてまたここが大きな分岐点となりました。

―― こう見ると、神和住さんは非常に人生の踏ん切りがいいですね。
性格的にあまり考え込まずに「やってみるか」というタイプですからね。鹿屋に勤務した4年間は、毎週火曜日に東京から飛んで、金曜日まで滞在してという生活でしたので、マイレージが貯まりました。

ライバルであった坂井利郎（左）と

―― それから1999年からは母校の法政に移られるわけですね。
工学部に体育の教員がいないからどうだと声がかかりました。

デビスカップ日本代表監督としての8年間

―― その途中で、日本テニス協会にもずいぶん恩返しをされています。
鹿屋の在任中にデビスカップ日本代表の監督になって、8年間やりました。大学教授がナショナルチームの監督を務めるのは前代未聞だったかもしれません。学長に相談したところ、「いいじゃないの、やりなさい」と快諾してもらいました。

―― 限られた予算と時間で、チームの底上げというのは大変だったのではないですか?
現・日本代表チーム監督の竹内映二コーチがフルタイムのコーチでしたから、彼と細かく連絡を取り合うところからのスタートでした。
松岡修造頼みのチームだったので、一人ひとりが代表選手の意識とプライドを強く持つという意識づけも進めていきました。彼ら、負けても悔しがらないんだよね。個人スポーツであるテニスでチームとしてのまとまりを求めるのは、難しい仕事でした。日の丸を背負う重さを説いたり、チームのために命を懸けるという先人の話をしたりしましたけどね。

―― 2002年には、ボリス・ベッカー（ドイツ）やゴラン・イワニセビッチ（クロアチア）などを育てたボブ・ブレッドコーチと契約していますね。
はい、世界チャンピオンを育てた彼の考え方、練習の仕方はとても参考になりました。例えば2勝2敗で迎えたデビスカップのインド戦。本村剛一とリアンダー・パエスとの対戦は、本村が5連敗中と圧倒的に不利でした。彼はものすごいスロースターターなんですが、「任せろ」と言ってボブが

ベテランズテニスに出場（55歳）

本村に何をしたかというと、試合前にへとへとになるまで体力的に追い込んだんです。ダンベルをやらせて、ダッシュを何本もやらせて。僕らじゃ怖くてできないですよ。でもその試合、本村はストレートで勝っちゃった。

本村剛一

―― 世界チャンプを育てた人というのは、思考が違うんですねえ。

本当に。カリスマ性も必要なんだと思いました。代表監督をやった8年間は、当時強豪だったインドに勝てたし、ずっと勝てなかった韓国にも勝ったし、ワールドグループでチリまで行けたし、誇りと充実感の持てる期間でした。

錦織圭選手は選手育成の成功モデルの一つ

―― 全米オープンで準優勝など世界ランクで6位にまで上がった（10月13日現在）錦織圭選手について伺いましょうか。

4大大会は本戦に出場すること自体が選手にとって高い目標なのに、勝ち抜いて決勝に進出するなんて、本当に夢みたいなできごとです。大したものです。彼はケガが多いので、これからはそこだけは気をつけてほしい。

彼はね、彼自身の努力と忍耐があったのはもちろんですが、選手育成の一つの成功モデルですよ。小さいころに才能が発掘されて、中学生のうちにアメリカに飛んで、テニスアカデミーでプロコーチのもとで指導を受けて成長する。

では日本テニス界にとって、ジュニアで強い選手だけをピックアップしていくこのケースがすべてかというと、そうではないと思う。僕らのように中学、高校、大学の体育会で強くなっていく選手というのは、90%以上がそうでしょう。僕が大学で指導しているからというのもあるけれど、この90%の選手たちがまたテニス界のために貢献できるように大切にしてほしいという思いがあります。

―― 生涯スポーツとしてのテニスの楽しさを伝える指導者もたくさん必要ですよね。

そう、授業でもやっているんですけど、まずは自己紹介、あいさつができること。次に何気なくやっているプレーをどう説明するか。いい選手ほど、わかりやすく伝えることに難しさを感じるようです。

コーチの分業化を進める

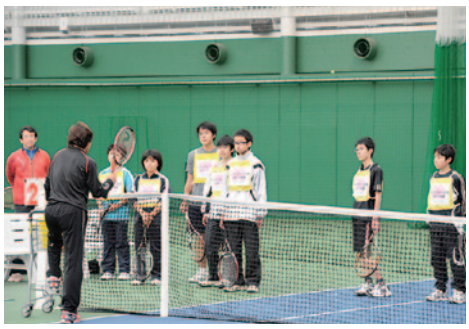
―― 2012年にはスポーツ基本法で「スポーツをすることは権利」と明文化されました。テニスにあてはめるといかがでしょうか。

とにかくテニス人口を増やすことが第一ですね。指導者の中には、ジュニア層を教えるのがすごくうまくて、「全日本で優勝させられるレベルまでは育てられるよ」という人材はいるんです。ただウィンブルドンにも出たことがないし、その先の世界がわからないと言う。テニスにおいては、たった1人のコーチがでトッププロまで育て上げる必要はないと思うんですよ。

―― コーチの分業化ですね。

そうです。キッズの指導、学生の指導、ナショナルチームの指導、トッププロへの指導と、コーチの特性を活かして棲み分けるシステムもありかなと思います。

2014年　全米オープンで準優勝した錦織圭の帰国記者会見


テニス教室風景

日本プロテニス界のパイオニア

神和住純

車いすテニスの土壌も整えたい

―― さあ、2020年には東京オリンピック・パラリンピック競技大会がやってきます。テニス界の展望としてはどうでしょうか。

僕は今はナショナルチームの強化とは絡んでいませんが、楽しみではありますね。錦織はちょうど30歳で脂が乗りきっているころでしょう。あとは今、活躍し始めている若手選手たちがどこまで成長してくれるかですね。

―― なんといってもテニスは、日本がオリンピックで初めてメダルを獲得した競技ですからね。（1920年の第7回アントワープ大会・シングルスで熊谷一弥、ダブルスで熊谷／柏尾誠一郎ペアがともに銀メダル）

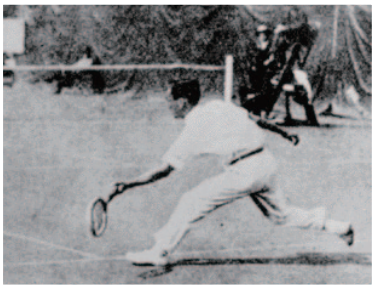
僕は1968年のメキシコオリンピックに、デモンストレーション競技ではありましたが出場しているんですよ。高地で苦しかったことを覚えています。世界で勝つ難しさも実感しました。そんなオリンピックで、僕が生きているうちに、史上3個目のメダル獲得を見られるかもしれないというのはわくわくします。

―― パラリンピックのほうはどうでしょうか。全米オープンの車いすテニスでは、国枝慎吾選手と、上地結衣選手が単複二冠のアベック優勝というすばらしい成績でした。

国枝さんと話をしたことがあるんですけどね、条件面、環境面などでまだまだ恵まれていない状況にあるそうです。例えば全米オープンではレギュラーツアーの優勝賞金は300万ドルのところ、車いすテニスの優勝賞金はその500分の1ほどらしいです。遠征も大変ですし、世界チャンピオンが優雅な生活をできるところまで引き上げていかないと、と思うんですよ。せめて日本での大会を増やしていくとか、もっと脚光を浴びるシステムをつくるとか考えていきたいですね

スペシャリストを目指そう

―― プロとしての極意というと、何かありますでしょうか?



日本初のオリンピックメダリスト
熊谷一弥（1920年アントワープオリンピック）

2012年
車椅子テニスの国枝慎吾

すぐ忘れることです。ミスや敗戦を引きずらない。すぐ次のゲームが始まる、すぐ次の試合が始まる。大会で優勝する選手はたった1人しかいないのですから、もうスパッと「次」へ「次」へと切り替えて新たな展開を考える。これだと思いますね。

―― それでは、将来を担う若手のアスリートへ、一時代を築いた神和住さんから、これだけは伝えておきたいというメッセージをお願いします。

好きなスポーツとしてテニスを選んだのなら、とことん追究して、あきらめずにチャレンジし続けてほしいですね。

今でも思い出すんですけど、法政大学を卒業して社会人になるとき、松本先生が別れ際に、「神和住くん、絶対にテニスで飯が食える時代になるから頑張りなさい」とおっしゃったんです。そのときはプロもなかったし、「先生は何を言っているんだろう?」と思いました。でも先生は先を読んでいらしたんですね。「プロの選手になりなさい」という意味ではなく、「スペシャリストになりなさい」という意味だったんだなあと。とにかく自分が一生懸命になれるものを選んで、それにひたむきに取り組んでいけば、それが飯の種になって、自分の支えになって、夢の実現に繋がるよと。

―― 神和住さんの場合は、それがテニスだったわけですね。

そうです。だから今は、僕が学生にその言葉を伝えています。

―― なるほど。どうもありがとうございました。

スポーツ歴史の検証
Sport History

1879 明治12
横浜・山手公園内に外国人居留者の
専用クラブとコートができる
文部省の体操伝習所で、
米国人教師リーランド氏がテニスを紹介

1897 明治30
東京高師の依頼で三田土ゴムが
国産ゴムマリ開発
軟式（現ソフトテニス）が全国に普及

1913 大正2
慶応大学が硬式（現テニス）を採用

1916 大正5
熊谷一弥氏、渡米
全米2位のジョンストンを破り全米5位になる

1918 大正7
熊谷一弥氏、全米でベスト4進出

1920 大正9
熊谷一弥氏、アントワープ五輪でシングルス
銀メダル、柏尾誠一郎とのダブルスでも銀メダルを
獲得し、日本五輪史上初のメダルとなる

1922 大正11
清水善造氏、ウィンブルドンでオールカマー制度
準決勝に進出し、世界4位となる
日本庭球協会（現日本テニス協会）創立
朝吹常吉氏、日本庭球協会の初代会長となる

1923 大正12
日本庭球協会がILTFに加盟
全日本ランキング制度開始

1924 大正13
原田武一氏、パリ五輪でベスト8進出

1925 大正14
全日本選手権女子開始

1931 昭和6
佐藤次郎氏、全仏でベスト4、
ウィンブルドンでベスト8進出

1932 昭和7
佐藤次郎氏、ウィンブルドンでベスト4進出

1933 昭和8
佐藤次郎氏、ウィンブルドンでシングルスベスト4、
布井良助氏とのダブルスでは決勝に進出し、
世界3位となる

1934 昭和9
三木龍喜氏、ウィンブルドンの混合ダブルスで
ドロシー・ラウンド（英）と組んで優勝し、
4大大会日本人初のタイトルとなる

1939 昭和14
日本、日中戦争に鑑み、デビスカップ参加中止

1941 昭和16
日本、全日本選手権をはじめ、主要競技会を中止

1942 昭和17
日本庭球連盟の上部団体、
大日本体育協会解散
国家統制組織、大日本体育会となり、
庭球協会も解散
庭球協会は大日本体育会の中の庭球部会となる

1944 昭和19
すべてのスポーツ活動中止

1945 昭和20
旧日本庭球協会復活
日本は連合軍に無条件降伏
1945 第二次世界大戦が終戦

1947 昭和22
全日本選手権に天皇杯下賜される
1947 神和住純氏、石川県に生まれる
1947 日本国憲法が施行

1950 昭和25
日本、ILTFに復帰が認められる
1950 朝鮮戦争が勃発

1951 昭和26
日本、12年ぶりにデビスカップ復帰
米国ゾーン1回戦で米国に敗退
1951 安全保障条約を締結

1952 昭和27
加茂幸子氏、日本女子として初めて全米に出場

1955 昭和30
宮城淳氏、加茂公成氏、男子ダブルスで
全米選手権優勝
1955 日本の高度経済成長の開始

1958 昭和33
第3回アジア競技大会が東京で開催

1959 昭和34
皇太子（今上天皇）のご成婚奉祝テニス大会を
両殿下ご臨席のもと、国立コートで開催

1964 東海道新幹線が開業
1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸

1970 神和住純氏、ユニバーシアードトリノ大会の
ダブルスで坂井利郎氏と組んで優勝

1971 昭和46
日本、デビスカップ東洋ゾーンAセクション決勝で、
50年ぶりに豪州を下す
石黒修氏、プロに転向（戦後初）

1973 神和住純氏、プロ転向
（戦後初のツアープロ）
1973 オイルショックが始まる

1974 昭和49
プレーヤーズ制度導入で日本体育協会と折衝決定

… 神和住純氏 略歴　… 世相

1974 神和住純氏、全仏1回戦で世界7位のスタン・スミス（米）を破る大金星
同年全米プロでもスタン・スミス（米）から勝ち星を挙げた

1975 昭和50
沢松和子氏、ウィンブルドンのダブルスでアン・キヨムラ（米）と組んで優勝

1976 ロッキード事件が表面化
1978 日中平和友好条約を調印

1980 昭和55
日本庭球協会が「財団法人 日本テニス協会」に変更

1982 東北、上越新幹線が開業
1983 神和住純氏、服部セイコー専属に転向

1986 神和住純氏、引退

1989 神和住純氏、有限会社「オフィス・カミワズミ」を設立。自ら代表取締役に就任する傍ら、テニス教育用ビデオの制作など、後進の指導に当たる

1992 平成4
松岡修造氏、韓国オープンで日本男子初のツアー優勝をし、日本男子過去最高の世界ランク46位となる

1994 平成6
伊達公子氏、ジャパンオープンで3連覇し、世界ランク5位となる
伊達公子氏、フェデレーション杯で日本女子初のベスト8進出し、95年世界グループ入りを決定

1995 平成7
伊達公子氏、全仏で4大大会日本女子史上初のベスト4進出
伊達公子氏、ツアー制度では日本選手最高位の最終世界ランク4位となる
松岡修造氏、ウィンブルドンで日本男子62年ぶりのベスト8進出
沢松奈生子氏、阪神・淡路大震災で実家半壊の中、全豪ベスト8に進出
1995 神和住純氏、鹿屋体育大学教授に就任
1995 阪神・淡路大震災が発生

1996 平成8
日本、フェドカップ世界グループ初戦でドイツを破る大金星
伊達公子氏、日本女子で初めて世界1位のシュテフィ・グラフを破る
伊達公子氏、日本女子初のウィンブルドンでベスト4進出
伊達公子氏、引退

1997 平成9
松岡修造氏、引退を表明（98年ジャパンオープンが最終試合）
1997 神和住純氏、デビスカップ日本代表監督に就任
1997 香港が中国に返還される

1999 神和住純氏、法政大学教授に就任

2002 平成14
杉山愛氏、ウィンブルドンのダブルスでキム・クライシュテルス（ベルギー）と組んで準優勝

2003 平成15
杉山愛氏、全仏とウィンブルドンのダブルスでキム・クライシュテルス（ベルギー）と組んで優勝

杉山愛氏、伊達公子氏以来2人目の日本選手シングルス・トップ10入り（10位）。
シングルス、ダブルス同時トップ10入りは初の快挙

2004 平成16
杉山愛氏、ウィンブルドンで96年伊達公子氏以来日本女子史上2人目のシングルス・ベスト8に進出
杉山愛氏、浅越しのぶ氏、アテネ五輪女子ダブルスで、4位に入賞

2006 平成18
日本、フェドカップで97年以来の世界グループでトップ8復帰
国枝慎吾氏、車いすテニスで、日本人史上初めてシングルス世界1位の快挙を達成

2007 平成19
国枝慎吾氏、車いすテニスで、史上初めて年間グランドスラム達成の快挙
錦織圭氏、2月のデルレービーチ国際で92年松岡修造氏以来、日本男子史上2人目のツアー優勝

2008 平成20
全米でも日本男子71年ぶりの4回戦進出
クルム伊達公子氏、5月に12年ぶりの現役復帰
11月の全日本選手権では16年ぶりに優勝
2008 リーマンショックが起こる

2009 平成21
楽天がジャパンオープンの冠スポンサーとなる
ジャパンオープンの女子がWTAツアーから外れ、ツアー下部大会のITF女子サーキットに格下げとなる
杉山愛氏、樹立した4大大会シングルス本戦62回連続出場の世界記録がギネスに認定
杉山愛氏、森上亜希子氏が引退

2011 東日本大震災が発生

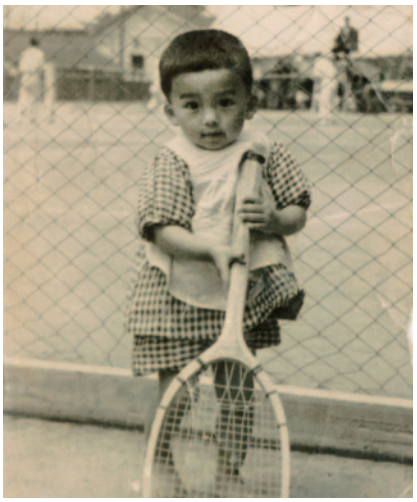
2014 平成26
錦織圭氏、全米オープンテニスでアジア人初の準優勝

スポーツ歴史の検証
Sport History

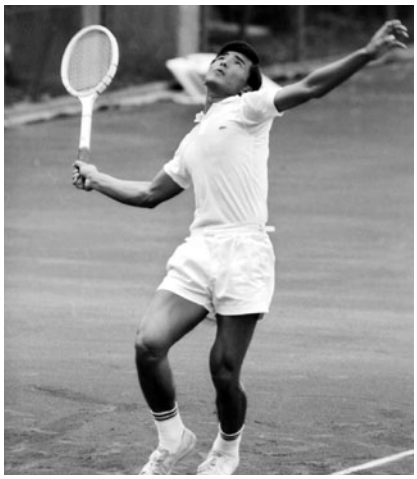
日本初のオリンピックメダリスト
熊谷一弥（1920年アントワープオリンピック）

生後まもなく両親と
（全日本ソフトテニス選手権の会場にて）

両親、知人家族と


2歳の時、ラケットを持って

中学時代、パートナーの竹下君（右）と


華麗なサーブフォーム

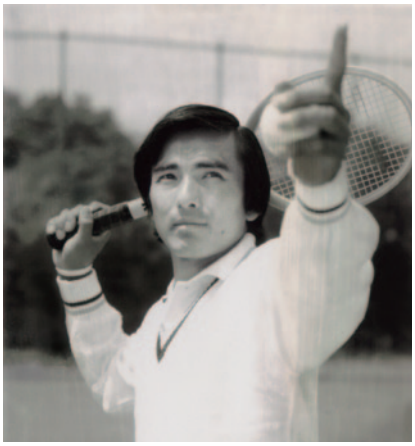
1970年　ユニバーシアードトリノ大会ダブルスで優勝
右は坂井利郎

初の海外遠征へ出発（左は1年先輩の浅田さん）

バックハンド（ウィンブルドン）

初の全日本チャンピオンに輝く（24歳）

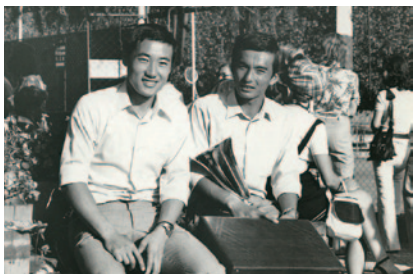
ウィンブルドンでアン清村と混合ダブルスを組む


CMに出演

フォアストローク(ジャパンオープン)

1974年　ジャパンオープンで優勝

1972年　ウィンブルドンに坂井利郎とダブルスを組み出場


ライバルであった坂井利郎(左)と

伊達公子(右)と

ベテランズテニスに出場(55歳)

本村剛一

テニス教室風景

2012年　車椅子テニスの国枝慎吾

2014年 全米オープンで準優勝した錦織圭の帰国記者会見

神和住純